

### 70. 東田辺小学校のビオトープ(※)

平成10年(1998年)12月に東田辺地域住民やボランティア、小学校の子ども達の協力により竣工しました。市街地の中にトンボやホタルが飛び立つ自然環境が再生され、ポンプにより、水が循環し、浄化されています。毎年6月には「ホタルの夕べ」が開催され、多くの人が集まります。ビオトープ竣工以来、大阪府内外や遠くは東京方面からの見学者もあり、東田辺の「希望の泉」として、そのシンボルの1つとなっています。

※ビオトープ (Biotope)・・・人工的に造られた小域生物生息場所



## 71. 平等橋付近の今川と息長川論

平等橋の北側は今川緑道で、桜トンネルのような桜並木と、ユキヤナギが美しい堤の南端ですが、昭和の中頃までは、この橋から東に向かって、現在の常磐会短大(旧巽池と北池)に至る平等堤の西端に当たり、さらに平野に向かう八尾街道(住吉-中野-平野-八尾)の中間点になり、また喜連環濠を水源とする喜連川と今川との合流点でもありましたので、主要街道の交差点や水路の合流点として重要な橋でした。実際に江戸時代中頃に書かれた土橋家文書の中には、平等堤とその北側にあった元平等院の寺領であった字・平等との文字が読みとれ、平等堤がその北側にある平等院の寺領を、喜連川の洪水から守るために構築された堤だと云われていました。しかし今川や喜連川は、江戸中期に「悪水抜」と表記されるような農用と生活廃水の細い水路であり、排水用水路として昭和中頃まで同様な形態で残っていました。

しかも、当時の平等橋の南側一帯は一面水田であり、川幅やその水量から見て、到底奈良時代の息長川を想定できるものではありませんが、江戸時代の古伝承を伝える並河誠所や森幸安(※)などは、今川や喜連川が奈良時代には息長川であったと主張し、東住吉区史も並河誠所の撰津志の記述を認めて、今川が息長川であると表示しています。

### ※森幸安

京都出身。伊能忠敬など後学にも大きな影響を与えた歴史地理学者。江戸時代に畿内と日本全国の歴史地理情報のほか天文図、世界図、地球図、東アジア図などを500点以上も、彩色・手書きで書き残し、各地に現存しています。後年、平野(ひらの)にも居住していました。





## 72. (財)平野区画整理記念会館

### 1. 平野土地区画整理事業の概要

宅地造成を目的とする面的整備であって、その手法は、施行区域内の土地所有者がそれぞれの土地の一部を公共施設用地として提供し、道路、公園、下水道等を整備するもの。

大阪市平野土地区画整理組合→昭和5年(1930年)12月設立認可

施行面積→391ha(旧平野郷町の大半とその周辺を含む18カ町村)

### 2. 平野区画整理記念会館の設立

50年に亘る大阪市平野土地区画整理組合事業の完成を記念して、地域住民が明るく住みよい地域社会づくりと、コミュニティの輪を広げるため、昭和57年(1982年)12月13日財団法人として設立。昭和58年(1983年)4月15日開館

### 3. 会館の目的および目的達成事業

- ・ 地域住民の福祉、文化の向上を積極的に図り、以って望ましい地域社会の発展に寄与することを目的とする。
- ・ 住民の文化の振興、福祉、体育向上に関する講座および研究会並びに講演会等の開催。
- ・ 郷土芸能および文化財などに関する資料の保存に対する助成。

平野区画整理記念会館



### 73. 平野川

大阪府が管理する一級河川で、名の通り、平野区の北部を東から西に流れており、大和川からの分派点（柏原市古町二丁目）から第二寝屋川への合流点（森之宮二丁目と中浜一丁目の境）までの17,4kmの川です。

東住吉区では生野区との境界を流れています。東部市場の北側では暗渠となっており、上部は駐車場に使われています。

現在は、今川が生野区林寺1と東住吉区杭全4の位置で駒川と合流し、僅か200m北東の東住吉区杭全1と林寺6(生野南小学校の南西隅)で平野川に合流しています。

大和川付替の江戸時代中頃までの平野川には、大乘川、大水川、東除川、馬池谷筋(喜連川・今川)、狭山西除天道川の全てが、合流していたので、「河内国息長川論争」の候補河川として、「平野川こそ息長川である」とする説があります。また一方では、「喜連川・今川こそ息長川である」とする説もあります。(No. 71 平等橋付近の今川と息長川論 参照)



## 74. 今川堤の花の道



花の道



花碑



ぼんぼりと棧敷

今川堤の緑道に北は杭全2丁目から、南は中野3丁目迄の15ヶ所に美しい花碑が建てられています。中には夏草に覆われて姿を隠し、草刈りの際に、その存在に驚かされるものもあります。

緑道に植えられた花々を紹介し、それにまつわる風俗や習慣、遊び方等が解説されて、ここを散歩する人達を楽しませてくれています。

今川堤は戦前は漆と松が主で、漆堤とも呼ばれた紅葉の名所でした。

戦後になって新しく梅、桃、桜、雪柳、等の花や樹木が植えられ、戦前とは趣を変えた、花を愛でる堤として生まれ変わりました。中でも、桜が沢山植えられたので、桜の新しい名所となり桜の時期には大勢の人が訪れます。紅白幕を張り、ぼんぼりや提灯を吊った棧敷の中で、歌ったり踊ったりしてパーティーや花見を楽しんでいる姿が多くみられます。

今川堤の花碑はこのような花々を紹介し、今川堤を楽しみ、大切にしてほしいとの願いから建造されたものです。散策の折には、一度花碑の前で足を止めてみませんか。



## 75. 佛願寺



真宗仏光寺派天堂山仏願寺本堂

天堂山 佛願寺（針中野2丁目3）

浄土真宗、仏光寺派に属し慶長4年（1599年）開基

現在の院主は、18代目 藤井良丸師

天堂山の山号は、昔、近くを流れていた天堂川（天道川）に由来しているのではないかとわれています。

山門の前（西側）には庚申街道が通っています。

### 76. 法樂寺

真言宗泉涌寺派大本山紫金山小松院法樂寺(田辺不動尊)が正しい名称で、昔から「田辺のお不動さん」の名で親しまれています。平家の棟梁・平重盛公の創建。創建の趣旨は、保元・平治の乱(親、兄弟が敵となり戦った)で戦死した霊を怨親平等(おんしんびょうどう)の精神で祀るためであり、源為朝の念持仏・如意輪観音菩薩が安置されています。本堂の建物は書院造り(移築)です。梵語(サンスクリット語)研究、人の道を説いた『十善法語』で知られる慈雲尊者(享保3年~文化元年(1718年~1804年))は13歳の時、ここで出家しています。

山門と本堂の間には力強い木組みの三重宝塔が樹齢一千年近い楠の大木と相對し、法樂寺の象徴となっています。

また、境内には、書家で恩賜賞受賞作家の小坂奇石の作品四百点余を収蔵しているリーヴスギャラリー小坂奇石記念館があります。



### 77. 法樂寺西側(大道)跡

法樂寺(No. 76)の西側塀に「難波大道がある」との掲示板があります。

実際に掲示板の通りに南に歩くと細い道が山坂神社(No. 83)の鳥居に当たります。

山坂神社は前方後円墳の跡と言われていますが、古墳の成立が大道より古いので、これでは説明が難しくなります。

そこで地図の上で、発掘確認されている「朱雀門跡」(中央区上町1-9、市立聾啞学校内)と、松原市天美西の今池浄水場内にある「大道跡」とを直線で結ぶと、山坂神社の少し東、法樂寺境内の西を抜ける筋に当たります。

つまり、法樂寺西側の壁は難波大道の上に建立されていることになります。

但しこれは難波大道が、上町台地の北端に建設された難波宮の南側正面の朱雀門から一直線に南に伸びる道との仮説に基づくものです





### 78. 松原住宅の並木

南田辺には飛鳥時代の伝承がありますが、山阪神社（No. 83）の南（松原新田）や西田辺（猿が沢山住んでいたのが猿山新田）が開発されたのは江戸時代です。

寛文3年（1663年）に南田辺村の濱田五兵衛が長らく未開拓であった村の南部の開墾を願い出たので、この地が松原新田と呼ばれます。（猿山新田は南田辺村の奥田市兵衛の開墾）

また、長池の川筋も松原新田として干拓され、住吉郡田辺村に編入されたのが明治22年（1889年）4月です。当時、この辺りはまだ野菜農園であって、収穫した田辺大根（No. 50）を山阪神社の南側を東に流れる綺麗な川水で洗っている「のどかな田園風景」が見られました。



大正3年（1914年）4月に南海平野線（061 南海鉄道平野線（廃線）の今昔 参照）が開通し、田辺停留所ができた時にボツボツと住宅開発が始まり、「平野線田辺停留所から南西へ10分」との広告が見られたとのこと。

昭和4年（1929年）7月に阪和線が和泉府中まで開通し、南田辺駅（鶴ヶ丘はなく）や臨南寺駅（長居）ができたので、この沿線での住宅建設が次第に盛んとなりました。

その頃の住宅建設は宅地の間を並木が植えられて、大変風情のあるものであって、松原住宅には11本の道路が南北にあり、西から梅檀（センダン）通、銀杏（イチョウ）通、青桐（アオギリ）通などと名付けられていました。

また、松原住宅の中央部の交差点は円形に広くとられ、かつてはここで、バスが転回していたそうです。

しかし、この並木も次第に切り倒されて、今は昔年の面影を失いましたが、ところどころには、まだ、当時の樹木が残されています。

## 79. 緑橋と楯原橋

今川 (NO. 6) の改修にあたり、大阪市はこの2つの橋を歴史を通じて、人々になじんで貰いたいと願って「歴史の橋」第1号に指定し、百済瓦風のデザインが採用されました。

### ・ 楯原橋 :

このあたりの古い字名が「楯原」であったので、橋の名前も「楯原橋」とされました。実際にこの近くに元の楯原神社が鎮座していたという伝承があります。橋の四隅の親柱には楯型の御影石が使われています。この場所から古代の瓦が出土したので、百済の地名があるこの付近に百済からの渡来人が多く住み付き、瓦造りを行ったと考えられています。



### ・ 緑橋 :

平成10年(1998年)頃に、この橋近くの川面に大きなオニバスが群生し、美しい花を咲かせました。最近は今川吐水口から定常的に平野処理場の3次処理水が放出されているので、オニバスが発芽しなくなり、川底に埋まっているとのこと。つまり、オニバスには川底が干上がるような渇水期が必要なのです。かわりに、ホテイアオイやコナギが川一面に繁茂しています。(008 今川のオニバスや、コナギ、ホテイアオイ 参照)